

# 資本主義の再構築 ～今 企業は何をすべきか～ 「未来への羅針盤」私たちは 2050 年の社会をどう生きるのか

## 開催報告

2021年10月26日(火)、グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン主催(GCNJ: Global Compact Network Japan)、後援: IGES 地球環境戦略研究機関による年次シンポジウム『資本主義の再構築 ～今企業は何をすべきか～「未来への羅針盤」我々企業は2050年の社会をどう生きるのか』を開催いたしました。

世界の気候危機が身近に迫り、予測不能な現代社会の中で、企業も今、長期ビジョンとして2050年を見据え、より大胆な行動変容を迫られています。本シンポジウムでは「2050年 社会の姿とは？」をテーマにそれぞれの立場から見た2050年を語り、お互いの価値を認識し合いながら「2050年 社会の姿」を考察しました。

### 【基調講演】

第一部では基調講演「2050年の社会に向けて、ビジネスリーダーが持つべき視点とは？」と題し、「読書大全:世界のビジネスリーダーが読んでいる経済・哲学・歴史・科学200冊」著者で多摩大学社会的投資研究所教授・副所長の堀内勉先生にご登壇い

たきました。

はじめに、学問の成り立ちや人類の知の進化、宗教や哲学や経済がどのように進化を遂げたのかを解説いただく中で、読書は成長のための貴重な経験、人間が成長するための重要な要素のひとつであるということをご説明いただきました。

次に堀内氏ご自身の人生の振り替わりながら、立場とシステムという強固な枠組みにより人間が立場主義に囚われてしまっている実態を導き出し、「どうしたら幸せになるのか」「どうしたらよく生きられるのか」「どうしたらよい社会を築けるのか」という投げかけを与えていただきました。生きることの意味の探求が人間の根源的な問いであり、より善い生、より善い社会を追求していくことが人間の幸福であり、そのために教養が必要なのだということをお話いただきました。

最後に、宇沢弘文の提唱した社会的共通資本として、市場取引の対象とするべきではなく、社会全体で管理すべき共通資本としての「自然環境」「社会的インフラ」「制度資本」という社会装置についてご説明いただきました。こうした社会的共通資本の認識は、経済を人間に近づける活動として

のSDGsにも通じるものであること、また資本主義というシステムの中で絡み取られて身動きが取れなくなってしまった人間がもう一度主体性を取り戻すための運動としてSDGsをとらえなおす機会にもなるのではないかというお言葉をいただき、基調講演を締め括られました。



### 【報告】

第二部ではWBCSD“Vision 2050:Time to Transform”の紹介をしました。WBCSD Vision 2050のディレクターJulian Hill-Landolt氏より、WBCSD(持続可能な開発のための世界経済人会議)の組織と取り組みについての説明と、行動戦略Vision 2050の概要説明を動画でいたしました。Vision 2050では、進み続ける気候の緊急事態、生物多様性の著しい損失という自然界の

危機、拡大し続ける国内および国家間の格差へ対処すべく 5 つのフレームワーク (TIME FOR A SHARED VISION/TIME FOR ACTION/TIME FOR A MINDSET SHIFT/TIME TO SUCCEED/TIME FOR LEADERSHIP) に沿って、90 億人以上がプラネタリーバウンダリーの範囲内で豊かに生活できるようになるための行動指針、現実的な道筋を指し示しています。また最後に WBCSD「Vision2050」日本語版 (<https://www.wbcsd.org/Overview/News-Insights>) を策定に携わった損害保険ジャパン株式会社 本田恵氏にご紹介いただきました。

#### 【パネルディスカッション】

第三部では、不二製油グループ本社株式会社 CEO 補佐 (GCNJ 理事) 河口真理子氏をモデレーターに迎え、株式会社ヴォンエルフ 代表取締役・株式会社 Arc Japan 代表取締役 平松宏城氏、コモンズ投信株式会社 代表取締役社長 兼 最高運用責任者 伊井哲朗氏、損害保険ジャパン株式会社 取締役執行役員 酒井香世子氏、「未来への羅針盤」企画 参加者 阿保翠氏、江口健介氏にご登壇いただき、「2050 年 社会の姿とは？」をテーマに、活発な意見交換を行っていただきました。キーワードは、「フラット、可変性、対話、多面的、生産・消費の中間」となりまして、議論した内容を簡条書きでご報告いたします。

・株式会社は一義的には株主のためとされているが、2050 年の「地球環境」と「ウェルビーイング」のありたい姿を考えると、企業はあらゆるステークホルダーを意識すべきで、現状の「株式会社」という枠組

みは不要になるのではないかと。また、株主資本主義ではない考え方を支持する投資家も出てくるだろう。

・社会課題を見つけて解決していく姿勢について、NGO と企業の境界線はなくなってきた。

・大企業の縦割りの組織だと、社会課題に柔軟に対応できない。フラットな組織で可変性の高い組織の方が、ウェルビーイングをめざすには適している。

・同様にサーキュラーエコノミーについても、一企業・同業で取り組むのに限界があり、様々なステークホルダーで取り組む必要性がある。若手の起業家のエネルギーも重要だが、大企業だから実現できることがあり、確かに組織の在り方は考えるべき。

・プラネタリーバウンダリーを中心に置いて、人間社会の在り方を政府・企業・NGO での対話を行うことが重要。

・大企業も統合報告書の中で E のパートが増えてきており、意識が大きく変わっていると感じる一方、ベンチャー企業はカーボンネガティブで事業を全て行うという宣言をしている若手が増えている。(当たり前化している)

・新しい芽を育てる一つのやり方は、一からつくるのではなく、今あるものを見直す。既存のものを「プラネタリーバウンダリー」

「ウェルビーイング」の視点で見直すと、直すところだらけ。生産か消費ではなく、その中間に大きなポテンシャルがある。

・新しい芽を大企業に育てる一つのやり方として、オープンイノベーションについて大企業と対話をしている。上から目線でベンチャーを評価する企業は失敗する。自分たちにないものに対して、謙虚な姿勢を持

つ企業が重要。今までの大企業では持ち合わせていないものを持つベンチャーと組むことは重要。

・既存の仕組みに若者の声を反映することはできる。政府や自治体等が実施するパブリックコメントは業界団体などの意見であり、そこで若い人の声が反映されていない。デジタルで若者の声が反映される仕組みをつくる。エネルギー基本計画について、若手の意見が反映されるといい。

・若者は、事業の経験が不足して提言についてまとめた主張ができない。そのまま提言するのではなく、経験豊富な企業の先輩がフラットにアドバイスすることで、実現可能となる。

・真剣に変わろうと思っている企業は、ありたい姿を再定義して、そこからバックキャストでミッション・パーパス・バリューを再構築している。その実行を見ると企業の変革の本気度がわかる。

以上となります。



本年はオンライン開催にもかかわらず 393 名の方にご参加いただきました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

以上